

和歌山市東部地区埋蔵文化財

第 二 次 分 布 調 査 概 報

(古 墳 ・ 窯 址)

関西大学考古学研究室編

和歌山市教育委員会

昭和43年3月

目 次

例 言

はじめに	1
I 調査日誌	2
II 分布の状態	4
A 古 墳	4
B 窯 址	6
III 各遺跡の現状	8
遺跡一覧表	12
IV ま と め	14
調査団の組織および参加者名簿	16
地区別分布図 (1 ~ 4)	

1. 本概報は昭和43年2月～3月にかけて踏査した西山東地区・木枕地区・東山東地区の分布調査の記録である。
2. 古墳名については、すでに『西山東村誌』『はにわ』『和歌山県遺跡地名表』『麻裳』などによって使用されたものがあるが、本概報では新しく通し番号によって呼び、旧古墳名で確認されたものを一覧表の備考欄に示した。
3. 本概報は古墳・窯址についてのみ報告し、散布地・弥生・縄文・寺址などについては別の機会にゆずることにした。
4. 本概報は調査事実を速報したものであるから、詳細な検討、考察は後日あらためて本報告で行なう予定である。その際、記述内容に若干の訂正を加える場合があるかもしれない。
5. 分布図における遺跡は、西山東地区1号墳の場合、○印をうち西1のように示した。又窯址は西山東地区のみであるので、×印をうち1あるいは2とのみ示した。

は　じ　め　に

分布調査に従事すると、われわれは地中に深く眠る埋蔵文化財のデスカバラー（発見者）でありインベスティゲーター（探求者）であるということよりも、プロテクター（保護者）でありキーパー（番人）であるという感を深くする。非情な都市化の波が容赦なくうち寄せる都市周辺地域にもかかわらず、昔ながらの静かな山かげや、林や、藪の中で、ひっそり千年の眠りを貪ってきた須恵器の破片などを見出すとき、私たちは、それを取上げ観察する前に、そっと元通り朽葉をかぶせて保存しておきたい衝動を覚えるのである。思えば私たちも、学問のためと称して、都市化の時流に便乗して古墳をあばき、古代人の静かな眠りを妨げることの多い昨今ではないか。こんどの調査は、考古学研究者である私たちが、内心実は、古代人の生活をそっとそのまま守ってゆきたいと願っている、という平生は表面に出ない潜在意識を、お互みずから確める機会となったという点で、実に有意義なものであった。和歌山市教育委員会が、周辺地域の開発に先立って、あらかじめ埋蔵文化財の分布をたしかめておきたいという今回の調査方針に双手を挙げて賛成し、調査をお引受けしたのも、我々の同じ衷情のあらわれに他ならぬ。本書をひもとく方々は、この我々の衷情を諒として、埋蔵文化財の保護ということにいっそうの御理解と御協力を賜わらんことを望んでやまない。

この分布調査は、はじめ昭和41年度より3カ年計画で行われる予定であったが、和歌山市の都合によって、2年次目の本年度をもって打ちきられることになった。そのために、当初の予定よりも本年度の調査地域は急に拡大され、調査としてはかなり無理な日程で強行軍を伴う結果となった。それにもかかわらず調査に従事した学生諸君には、早春とはいえ粉雪の舞う寒風をつき、伊太祈曾周辺の山野を野兎のごとく駆けめぐった。深くその労を謝したいと思う。

調査実施に当っては、和歌山市教育委員会の担当部署の各位をはじめ、地許在住の研究者各位の熱心な御助力を得た。とくに今回は、小林国太郎・池端義員・奥一作の3氏の格別の御尽力を得た。併せて深甚の謝意を表する次第である。

昭和43年3月

菌　田　香　融

I 調 査 日 誌

昭和43年

2月19日 雨時々曇

午前9時12分天王寺を出発、和歌山に向う。10時30分、宿舎「紀の国荘」に到着。午後から明日の調査準備のため、1班は市教委との打合せ、2班は不慮の事故に備えて、医師・駐在所等の連絡場所の確認に行く。

午後4時30分より、関西大学蘭田教授を囲んで調査の打合せを行なう。

2月20日 晴

本日より現地調査を4班に分けて開始。1班は地元研究者である小林国太郎氏宅へ向い、史料の紹介、及び御意見を承った。2班は小林氏の案内で、西山東周辺の埋蔵文化財を見学する。3班は伊太祈曾神社裏の山塊を踏査し、多数の土器片を採集。須恵器窯址を1基確認する。4班は沙羅谷窯址の地形測量を実施する。

2月21日 晴

今回分布調査の東端である、菖蒲谷北方を踏査する。円墳らしきもの4基を確認。古墳と明確に断定できるのは1基のみであるが、残りの3基も古墳の可能性があるので、一応古墳番号を与えた。沙羅谷窯址も昨日にひき続き測量を実施。

2月22日 曇時々雪

八幡宮から菖蒲谷にかけて調査したが、遺跡の確認はできず、八幡宮裏の池西方の果樹園より、土師器の高杯脚部を採集する。調査終了後、井辺前山10号墳(八幡山)、井辺1号墳を見学する。沙羅谷窯址の地形測量は本日をもって終了した。

2月23日 晴

東池の北方地区を踏査。古墳を2基確認、いずれも円墳である。1基は丘陵下の谷状地形に築造されており、盗掘を受けている可能性がある。蜜柑畑の断面中より、土窯らしきものを検出。又周辺において須恵器片を多数採集した。

2月24日 曇時々雪

口須佐地区を調査。雪の中を蘭田教授も一緒に踏査したが、遺跡の確認はできず。

『岩橋千塚』報告書の完成祝賀会のため、調査を早い目に打ち切る。

2月25日 晴のち雪

西光寺周辺を分布調査。地元研究者である、奥一作氏の案内により、西山東7号墳(峯の山古墳)と窯址を見学する。西山東7号墳の南斜面において、多数の埴輪片を採集する。

2月26日 晴

大池の南一帯を踏査。遺跡の存在は認められず、須恵器片を若干採集しただけであった。

2月27日 晴

伊太祈曾神社の南方を調査。地元研究者である池端義員氏より、史料の紹介を受ける。

又池端氏の案内により、窯址の確認、及び現在竹藪になっている地点において、開墾以前に17基の古墳が存在していたとの話も承った。古墳2基に遺跡番号を与える。

桜山城跡、医王寺跡にも、一応遺跡番号を与える。

午後4時より、將軍塚周辺の古墳を見学する。

2月28日 晴

貴志川線伊太祈曾駅の北方にある、木枕地区を踏査。古墳7基の存在を確認する。8号墳、9号墳は尾根先端にあり、近接して築造されている。

貴志川線山東駅北側の畑地内において、須恵器片のおびただしい散布がみられるため、遺跡番号を与えた。

2月29日 曇のち雨

調査参加者の疲労度を考慮して、本日は、休養日とした。

3月1日 晴

貴志川線伊太祈曾駅北方の山塊を調査し、古墳5基を確認する。3号墳においては、開墾地に墓と箱式石棺と思われる板材が存在していたため、古墳番号を与えた。5号墳は径が20mある円墳で、横穴式石室を有している。関西大学綱干善教講師現地指導される。

3月2日 晴

下池・中池の北方の調査を行なう。古墳1基を確認。当古墳は横穴式石室を有しているが、半壊している。

3月3日 晴

大河内方面を踏査。古墳の存在は確認できず。この地域は蜜柑畑による開墾が著しい。調査を早目に引き上げて、太田・黒田弥生遺跡の発掘現場を見学する。

3月4日 晴

北池と新池の間を、南に派生する尾根上を調査。遺跡を確認するに至らず。

3月5日 曇のち雨

昨日調査をした丘陵の反対斜面を踏査する。遺跡の存在は認められず。

3月6日 曇のち雨

北谷西斜面と北池北側を踏査するも、遺跡の存在を認めるに至らず。

3月7日 晴

北池南側を分布調査するも、遺跡の確認はできず。

午後4時小手穂字相方、通称向日山を踏査。古墳2基の存在を確認する。2基とも円墳であり、1基は乱掘塚がある。

3月8日 雨

雨天のため、現地調査を中止し、室内作業を行なう。

3月9日 晴時々曇

赤松と毛地谷の東側丘陵を調査する。遺跡の存在を確認するに至らず。本日をもって今回の分布調査は完了した。

3月10日 晴

今回の調査区域に隣接する貴志川町周辺の古墳を見学し、残務整理班を残し、各自帰宅した。

3月11日

残務整理班は宿舍の会計、遺物の運搬の手配をなし、帰宅した。

Ⅱ 分 布 の 状 態

昭和43年2月～3月に実施された第2次分布調査は、昭和42年度の第一次調査より、さらに東部及び南部地区の伊太祈曾盆地周辺部を踏査したものである。本概報は古墳と窯址についてのみ記述することにし、縄文・弥生・散布地・城址等については、他の機会にゆづりたい。

以下、西山東・木枕・東山東地区について述べようと思うが、地区割りについては、第一次調査概報にも述べたように、各古墳の内容を具体的にとらえていない現在、そのグルーピングについては、全く便宜的に現在の行政区画・丘陵・川などによって、機械的に分類したものにすぎないことを御諒承いただきたい。

A 古 墳

西 山 東 地 区

西山東地区は北は和田川以南、東は医王寺、南畑・黒岩を結ぶ線以西、南は黒岩・黒谷・新出・境原・馬場を結ぶ線、西は県道沖野森小手穂線以東の範囲を示す。

本地区には古墳8基と、窯址4基を確認した。1号墳～4号墳は、南北1Km、東西0.8Kmの独立丘陵上にある。1号墳は丘陵西部の頂部より南に向って延びる尾根上、標高約50mの斜面上にある。2号墳も頂部が北に向って下降する尾根上西斜面にあり、ほぼ同様の標高を示す。3号墳は1号墳の西南約100mの地点にある。この部分は南より深く入り込む谷状地形を示し、かなり急斜面に立地する。標高63.8mの頂上部より、南に向って延びる舌状の尾根標高約30mの西斜面に4号墳がある。3号墳の南約300mにあるこの地点は、西に延びる尾根と南に延びる尾根の間にあって、ゆるやかな谷状地形をなしている。6号墳は東池北方100mの丘陵上にあり、標高57.6mの頂部より派生する尾根斜面上標高50m地点にある。5号墳はこの丘陵北方にあり、丘陵西側の山脚にあり、北より入り込む標高10m前後の谷状地にある。7号墳は4号・5号墳の所在する丘陵東にある吉里の丘陵上に立地する。北に向って舌状に長く延びる尾根の先端標高24.4mの頂上部にあり、通称峯古墳と呼ばれている。8号墳は伊太祈曾神社境内にある、南より北に向って舌状に延びる尾根の先端頂部にある。

以上西山東地区における古墳の分布について略述したが、その数については、地元の聞き取り、『西山東村誌』・『はにわ』などによると、口須佐・チシヨ古墳（直刀出土）、松満寺古墳（須恵器出土）、吉里・吉里小山古墳、松原南山・松原古墳（須恵器出土）が知られるが、我々の踏査の際には認めることができず、すでに消滅したものと考えられる。これら4基を加えると、12基以上の古墳がかって存在したことになる。

確認された8基の円墳の規模は、不明なもの3基を除いて、10m以内2基、10～20mのもの2基、20～30mのもの1基と、その規模は均一ではない。

内部主体については、8号墳が両袖式の横穴式石室で、岩橋千塚に通有の緑色片岩系の板石を小

口積にしたもので、一枚の棚と3本の梁をもつ美しい石室である。

遺物については知るところは少ない。

木 枕 地 区

木枕地区は南は大池尻・北谷、伊太祈曾を通過して流れる和田川以北、西は平尾、十谷池を結ぶ谷線、北は塩谷・矢田の両集落と新池を、東は新池から高岡に至る谷線の範囲を示す。

さて1号墳は伊太祈曾駅北東約500mに、高積山・城カ峯・金谷峠と南北に走る稜線の南端部があり、現在児童公園になっている頂上部にある。封土の流出が著しいが、古墳外部を劃する掘割りなどもみられる。2号墳は1号墳の西100m、標高30mの舌状地にある。3号墳～7号墳は城カ峯より伊太祈曾盆地に向かって南下する、幅の狭く長い尾根上にあり、いずれもほぼ先端部付近にある。3号・4号墳は伊太祈曾盆地に近く、標高30m付近にあり、3号墳が頂上部に近く、4号墳が西側30mの傾斜地にある。3号墳は現在封土を失ない箱式石棺の棺材と思われる板石と、須恵器礎の完形品を確認したため古墳番号を与えたものである。5号・6号墳は3号墳のさらに北側標高25mの小ピーク西斜面にある。5号墳は天井石が持去られて土砂が流入しているが、横穴式石室と推定される。7号墳はさらに北側200mの舌状をした尾根頂部にある。8号～10号墳は、1号・2号墳の所在する尾根より東側の丘陵上南斜面裾部にある。8・9号墳は南西に突出する小舌状斜面地にみられ、8号墳が標高約25m、9号墳が約30m付近にみられる。10号墳は、8・9号墳の東隣りの舌状地にあり、標高約35mの地点に立地する。11号墳は10号墳の所在する尾根北斜面側にあり、標高約45m付近のやや急斜面をなす部分にある。以上11基の古墳の立地について述べたが、他に須恵器須恵器、高杯の出土した地点が1カ所みられたが、墳丘と内部主体を認めることはできなかった。

以上11基の円墳について、その立地を略述したが、他に『はにわ』などによると、赤山古墳・足神社古墳群(2基)・渡瀬古墳・丸山古墳などが知られるが、すでに消滅して確認することができなかったが、それらの出土品から考えて、古墳であった可能性が大きい。したがって、木枕地区においては16基程度の古墳があったと考えられ、西山東地区に比べて、分布は狭い範囲に密であることが知られる。

古墳の規模は、不明10基、11～15m4基、16～20m2基で中型の古墳規模を示す。内部構造は横穴式石室3基と箱式石棺と推定されるもの3基を除くと他は不明である。

出土遺物については、小林国太郎氏蔵の11号墳(中垣内古墳)の遺物を見せていただくと、玉類(丸玉・小玉・管玉)、馬具、鉄刀、鉄鏃、須恵器、土師器があり、ほぼ土器形式より考えてⅢ形式のものと考えられる。

東 山 東 地 区

東山東は大池尻・北谷を通過して流れる和田川以南、黒岩・南畑・伊太祈曾を流れる和田川以東、

東の限界は高岡・中池・上池の間を通り、大河内・南畑に至る線に囲まれた地域を示す。この地区における古墳は一基を確認したのみである。1号墳（高岡古墳）は山東駅東方約0.5Kmにある丘陵先端部西斜面にある。この丘陵は標高167.8mの鶏冠山から西に派生する丘陵で、金谷峠から南下する丘陵とで狭い谷状地を形づくっている。本墳はかなりの急斜面にあって、南に開口する横穴式石室を露出している。

以上東山東では、踏査面積もやや少ないが、古墳の存在は1基のみであり、岩橋千塚北斜面などの古墳数に比して、奇異の感を禁じ得ない。

寺内地区の一部

本地区はこれまで寺内地区、山東地区踏査の際に脱漏したものである。今回調査の地点は、吉礼集落の北西約0.3Kmにあり、寺内57号墳（通称高塚）の所在する尾根が南に延び、県道和歌山野上線が東西に走る地点で、標高約10mまで下降し、再び標高73.2mのピークまで上昇する丘陵、南北・東西ともに約1Kmの一見独立小丘陵を呈する頂上部稜線に2基の円墳を確認した。寺内61号墳は標高73.2mの最も高い部分に位置し、62号墳はさらに南80mの尾根上にあり、標高約60mの地点にある。両墳とも内部主体は不明である。

墳丘規模は21m、22mといずれもやや大形の円墳である。寺内地区は『岩橋千塚』所収の円墳で、規模の測定できた古墳は39基であるが、さらに今回の2基と、前年度の59号、60号墳を加えて43基となり、5～10m13基、10～15mが一基増して18基、15～20mが一基増加して6基、20～25mが2基新しく加わって2基、25～30m1基、30～35m3基となる。

B 窯 址

窯址は西山東地区において4カ所が確認されたが、他の地区では寺内地区に所在する沙羅谷窯址について若干知られているに過ぎない（寺内59号墳・60号墳調査報告参照）。勿論ここに報告する4カ所も、かなりの量の須恵器の散布をみた地点、あるいは窯壁の一部を数えたもので、窯体を確認したものではない。したがって、その須恵器の量や灰原の範囲から考えて、その地点に数基の窯が存在すると予想されるものについても一基として取扱ってある。

西山東1号窯～3号窯と名付けた窯址は、奥須佐の北から南に深く入込む谷状地の左右の丘陵上にある。1号窯は伊太祈曾神社南方の丘陵が、標高58.3mの頂上部から南西に突出する小尾根と、北西に小さく延びる谷状地を形成する南斜面一帯に、多量の須恵器の散布をみた地点を示す。2号窯はさらに1号窯の所在する尾根上80m北西部西斜面にみられる。標高約23m付近である。3号窯は西山東7号墳の所在する丘陵付根部にあり、現在「西光寺」建立のため破壊されたかと思われるが、境内一帯に破片を見ることができる。4号窯は和田川が伊太祈曾から南に曲折し、南に深

く入込む谷状地をさか上って南畑の集落西側に南から北に向って延びる丘陵上にあり、標高 77.1 m の小ピークが北に向ってゆるやかに下降し、標高 70 m 付近から北と西に派生する小尾根がみられる。そのわずかな小凹地にみられる。

以上 4 カ所の窯址の分布について略述したが、採集した須恵器片はいずれも若干時代がくだるもののようである。

Ⅲ 各 遺 跡 の 現 状

各遺跡の現状を述べるにあたって、古墳については、古墳番号の次の()内に示したのは調査番号で、又叙述中の(1)～(7)の番号はそれぞれ、(1)所在地及び地目、(2)立地、(3)墳形及び規模、(4)外部施設、(5)内部施設、(6)遺物、(7)備考を示している。又窯址については、窯番号の次に()に入れて示したのが調査番号で、叙述中(1)～(5)の番号はそれぞれ、(1)所在地及び地目、(2)立地、(3)窯の形式、(4)遺物、(5)備考を示している。

西山東地区 古墳番号 1 (VI-A-1)

(1)和歌山市安原菖蒲谷にあり、現在雑木林になっている。(2)頂上部の平坦部にある。(3)円墳で南北径 1 2.3 m、高さ南 1.0 m、北 1.5 m を測る。(4)(5)(6)不明 (7)乱掘

西山東地区 古墳番号 (VI-A-2)

(1)和歌山市西山東相坂にあり、現在雑木林となっている。(2)頂上部稜線西側にある。(3)円墳で径 2 1 m、高さ 3.5 m ある。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘中央部に 4 × 2.5 m、深さ 1 m の乱掘 あり。

西山東地区 古墳番号 (XI-A-3)

(1)和歌山市西山東相坂にあり雑木林となっている。(2)尾根西斜面にある。(3)円墳で径 8 m、高さ 0.8 m を測る。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘の東側に石が立っている。

西山東地区 古墳番号 4 (VI-A-4)

(1)和歌山市西山東にあり、現在雑木林となっている。(2)谷の裾部に位置する。(3)円墳で径 5 m、高さ 2 m を示す。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘上に小石の存在を認める。

西山東地区 古墳番号 5 (VI-C-1)

(1)和歌山市西山東にあり、現在雑木林となっている。(2)谷間の入口に位置する。(3)円墳で径 6.5 m、高さ 2 m を示す。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘中央部に乱掘 痕がある。

西山東地区 古墳番号 6 (VI-D-1)

(1)和歌山市西山東相坂にあり、現在は笹藪である。(2)稜線西斜面にある。(3)円墳で東西 2 0 m、高さ 3 m、北 2 m を測る。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘頂部に盗掘 痕、墳丘南には、東西に溝が走る。

西山東地区 古墳番号 7 (VIII-E-1)

(1)和歌山市西山東奥須佐にあり、柿畑の頂上部にある。(3)円墳で南北径 1 6.5 m、高さ南北共

に約 1.5 m である。(5)(6)不明 (7)墳丘は開墾のため削りとられ、帯状に残っているだけである。又この古墳から約 20 m 南西の所で、埴輪片の散布をみた。

西山東地区 古墳番号 8 (Ⅶ-B-1)

(1)和歌山市伊太祈曾 558 にあり、現在雑木林になっている。(2)丘陵頂上部のやゝ西斜面に位置する。(3)円墳で径 16 m、高さ東で 0.5 m、西で 5 m を示す。(4)掘りわり? (5)横穴式石室、全長 5.6 m、玄室幅 2.07 m (6)不明 (7)西側部分の封土が流失している。

木枕地区 古墳番号 1 (Ⅸ-J-1)

(1)和歌山市東山東にあり、現在和歌山市立東山東児童公園になっている。(2)稜線南側斜面に位置する。(3)円墳で径 13.5 m、高さ 2 m を示す。(4)墳丘の北側において幅約 2 m の掘り割りが認められる。(5)(6)不明 (7)墳丘上部は低平であるが乱掘痕はみられない。

木枕地区 古墳番号 2 (Ⅸ-J-2)

(1)和歌山市東山東木枕にあり、現在ミカン畑と竹林とになっている。(2)丘陵稜線の頂上部に位置する。(3)円墳、径 19.6 m、高さ南 1 m、北 1.2 m を測る。(4)(5)不明 (6)形象埴輪一片 (7)墳丘は低平である。埴輪も南斜面の竹林で採集したので古墳と断定しがたい。

木枕地区 古墳番号 3 (Ⅹ-L-1)

(1)和歌山市吉礼にあり、現在開墾地となっている。(2)丘陵頂上部、やゝ北側に位置している。(3)(4)(5)不明 (6)須恵器甕 1 個 (7)開墾のため破壊されていた。須恵器甕 1 個とその附近に箱式石棺材と思われる。緑泥片岩数片を二カ所で発見した。

木枕地区 古墳番号 4 (Ⅹ-L-5)

(1)和歌山市 東山東塩谷にあり、現在開墾地になっている。(2)伊多祈曾盆地に向って北からのびる。支尾根の突端部頂上にある。(3)(4)不明 (5)箱式石棺 (6)不明 (7)消滅

木枕地区 古墳番号 5 (Ⅹ-L-2)

(1)和歌山市 吉礼にあり、現在墓地になっている。(2)稜線斜面に位置する。(3)円墳で径 20 m、高さ 3 m を示す。(4)不明 (5)南面の横穴式石室 (6)不明 (7)土砂が石室内に落ち込み実測不可能。

木枕地区 古墳番号 6 (Ⅹ-L-4)

(1)和歌山市東山東木枕にあり、現在は墓地である。(2)稜線鞍部に位置する。(3)円墳で径 13.6 m、高さ 3.2 m である。(4)(5)(6)不明 (7)墓地を作る際に墳丘東側 $\frac{1}{4}$ が削られている。木枕 4 号古墳 (Ⅹ-L-2) の東側約 20 m の地点に位置している。

木枕地区 古墳番号 7 (X-L-3)

(1)和歌山市東山東にあり、大部分は雑木林で一部開墾されている。(2)一支尾根の鞍部に位置する。(3)円墳で南北径約 1.8 m、高さ南側約 2.5 m、北側約 0.5 m である。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘東側は、ごく最近の開墾で、少し削られている。

木枕地区 古墳番号 8 (IX-H-1)

(1)和歌山市東山木枕にあり、現在ミカン畑と雑木林になっている。(2)丘尾に位置する。(3)円墳で径 1.5 m、高さ 2 m を測る。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘上に溝が走っている。

木枕地区 古墳番号 9 (IX-H-2)

(1)和歌山市東山東木枕にあり、現在ミカン畑と雑木林になっている。(2)尾根の先端に位置する。(3)円墳で径 1.5 m、高さ南で 1.5 m を示す。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘北側は $\frac{1}{4}$ ほど削られている。

木枕地区 古墳番号 10 (IX-H-4)

(1)和歌山市大池にあり、現在ミカン畑になっている。(2)小丘陵稜線上に位置していた。(3)円墳(4)(5)(6)不明 (7)消滅のため詳細は判らないが、聞き取りによって石廊を有していたことが判明した。

木枕地区 古墳番号 11 (IX-H-5)

(1)和歌山市東山東木枕にあり、現在竹林となっている。(2)尾根の先端に位置する。(3)円墳で径 1.4 m、高さ 1 m を示す。(4)北側に幅 2.8 m の掘わり。(5)(6)不明 (7)中央部に乱掘塚がある。

東山東地区 古墳番号 1 (VII-M-1)

(1)和歌山市永山 584 番地にあり、現在ミカン畑と竹林になっている。(2)稜線西側斜面上にある。(3)(4)不明 (5)横穴式石室で現存玄室長 1.4 m、幅 1.65 m (6)不明 (7)開墾の際出土した遺物は、山東小学校で保管されていると聞く。

寺内地区 古墳番号 61 (V-O-1)

(1)和歌山市小手穂字相方にあり、現在雑木林となっている。(2)稜線上に位置する。(3)円墳で径 2.1 m、高さ 4.5 m を測る。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘中央部に 5 × 3 m、深さ 1 m の乱掘塚がある。また東側が削られているのと、北側が乱掘時の土砂が堆積のためいじりく变形している。

寺内地区 古墳番号 62 (V-O-2)

(1)和歌山市小手穂字相方にあり、現在雑木林になっている。(2)稜線頂上部に位置する。(3)円墳で径 2.2 m、高さ 2 m を示す。(4)(5)(6)不明 (7)墳丘北部は一部ミカン畑開墾のため削られている。また墳丘中央部に浅い乱掘の跡がある。

西山東地区 窯番号1 (Ⅶ-F-1)

(1)和歌山市西山東吉里小字横にあり、現在雑木林になっている。(2)派生する小尾根間の谷間にある。(3)不明 (4)須恵器坏蓋、壺破片、その他 (5)池の岸に沿って約20mの灰原が認められる。窯体は確認できなかった。

西山東地区 窯番号2 (Ⅶ-F-2)

(1)和歌山市西山東吉里にあり、現在雑木林になっている。(2)狭長な尾根の西斜面に位置する。(3)不明 (4)窯体の一部 (5)ミカン畑に開墾された際多量の須恵器が出土したと聞く。しかし農道敷設により削られた山肌には岩磐が露出している。

西山東地区 窯番号3 (Ⅶ-E-2)

(1)和歌山市西山東吉里にあり、現在宅地となっている。(2)丘陵斜面 (3)不明 (4)須恵器片少量及び窯壁一部分 (5)宅地化のために完全に破壊されている。

西山東地区 窯番号4 (Ⅶ-P-1)

(1)和歌山市西山東南畑字新林にあり、現在ミカン畑になっている。(2)奥行きの浅い谷の斜面に位置する。(3)須恵器窯で登り窯と考えられる。(4)須恵器片多数 (5)散布量が多く、散布面積も広い。開墾時に完形の壺が三個出土したことを聞く。

遺 跡 一 覧 表

古 墳 の 部

西 山 東 地 区

古墳番号	調査番号	墳形	全長(m)	高さ(m)	内部主体	棚	梁	長さ×幅(cm)	遺物	外部施設	備考
1	VI-A-1	円墳	12.3	1.5	不明				不明		乱掘痕内に大きな結晶片岩あり
2	VI-A-2	円墳	21	3.5	不明				不明		乱掘痕あり
3	VI-A-3	円墳	8	0.8	不明				不明		乱掘痕あり
4	VI-A-4	円墳	5	2	不明				不明		
5	VI-C-1	円墳	6.5	2	不明				不明		乱掘痕有り「城カ森古墳」と呼称
6	VI-D-1	円墳	20	3	不明				不明		乱掘痕あり
7	VII-E-1	円墳	16.5	1.5	不明				不明		「峯古墳」と呼称
8	VII-B-1	円墳	16	5	横穴式石室	1	3	玄室 283×207 全長 563	不明	掘り割り?	墳丘西側流出

木 枕 地 区

古墳番号	調査番号	墳形	全長(m)	高さ(m)	内部主体	棚	梁	長さ×幅(cm)	遺物	外部施設	備考
1	IX-J-1	円墳	13.5	2	不明				不明	掘り割り	
2	IX-J-2	円墳?	19.6	1.2	不明				形象埴輪	埴輪	ミカン畑「楠古墳」
3	X-L-1	不明			箱式石棺?				須恵器魂(1)		ミカン畑
4	X-L-5	不明			箱式石棺				不明		破壊
5	X-L-2	不明	20	3	横穴式石室	1?		不明	不明		「五十山古墳」
6	X-L-4	円墳	13.6	3.2	不明				不明		墓地
7	X-L-3	円墳	18	2.5	不明				不明		
8	IX-H-1	円墳	15	2	不明				不明		
9	IX-H-2	円墳	15	1.5	不明				不明		
10	IX-H-4	不明			石室?				伝壺・朱		「花立山古墳」
11	IX-H-5	円墳	14	1.0	不明				不明		「中垣内古墳」

東山東地区

古墳番号	調査番号	墳形	全長高さ (m) (m)	内部主体	棚梁	長さ×幅 (cm)	遺物	外部施設	備考
1	VIII-N-1	不明		横穴式石室	1?	140×165	不明		「高岡古墳」

寺内地区の一部

古墳番号	調査番号	墳形	全長高さ (m) (m)	内部主体	棚梁	長さ×幅 (cm)	遺物	外部施設	備考
61	V-O-1	円墳	2.1 4.5	不明			不明		乱掘塚有り
62	V-O-2	円墳	2.2 2	不明			不明		乱掘塚有り

窯址の部

西山東地区

窯番号	調査番号	型式名	全長 (m)	遺物	備考
1	VII-F-1	登窯	不明	坏蓋・坏身・壺	灰原を一部破壊して池を作っている
2	VII-F-2	登窯?	不明	不明	窯壁の一部を採集、付近には岩盤が露出している
3	VII-E-2	登窯?	不明	坏蓋・坏身	宅地となり、ほとんど全壊、窯壁の一部を採集
4	VII-P-1	登窯	不明	坏蓋・坏身・壺	灰原は非常に大きい

IV ま と め

以上に昭和43年2月～3月に実施した、和歌山市東部地区埋蔵文化財第2次分布調査の概要を記した。本調査は昨年度実施された調査のあとを受けて、さらに東部の伊太祈曾盆地周辺部を中心にして踏査した。又調査後の見学によって和歌山市紀ノ川南岸の古墳分布の概要を知ることができたのであるが、今後貴志川町、さらに紀の川北岸の詳細を知ることが必要であろう。これらの点は今後の調査によって補なわれるであろうから、こゝでは伊太祈曾盆地周辺の概要および岩橋千塚古墳群との関連などについてまとめておきたい。

西山東地区は8基の古墳が知られたが、先述したごとく、直刀出土の口須佐チシヨ古墳、須恵器出土の松満寺古墳、吉里・吉里小山古墳、松原南山・松原古墳の4基を加えると12基の古墳が知られる。そのなかで伊太祈曾神社境内に所在する8号墳は、すでに西山東村誌などによって知られるごとく、横穴式石室が西に開口しており、本地区において唯一の内部構造を知ることのできるものである。略測によると玄室長283cm、同幅207cm、全長563cmの両袖式の石室で、緑色片岩を小口積にし、奥壁に石棚をもち、玄室には各1本の垂直梁と水平梁、羨道に1本の垂直梁をもつ、特色ある石室である。これは岩橋千塚の中の將軍塚などと同様の構造をもつものである。

又、7号墳(峯古墳)は、前方後円墳とする人もあるが、現在では開壘が進み、古墳かどうかさえも明らかでない。しかし墳頂部より南20mの付近で、円筒埴輪の破片がかなりまとまって採集されたが、その状態からみて埴輪窯などの可能性は薄いと思われるのであり、一応古墳を圍繞する円筒列と考えたのであるが、もしそうであれば、岩橋千塚の埴輪の使用状況からみて、やゝ時代的にさかのぼるかもしれない。しかしながら、本地区は遺物については知るところが少なく、時間的な位置づけは不明な点が多い。

木枕地区は伊太祈曾盆地の北辺を劃する、岩橋山塊南斜面を指す。本地区においては11基の古墳を見出したが、『はにわ』所収の赤山古墳、渡瀬古墳、足神社古墳群(2基)、丸山古墳は確認できなかったが、その遺物、石材から考えて、すでに消滅したものと考えられ、これらを加えると、16基以上の古墳が存在したことになる。16基の古墳はいずれも円墳と思われ、墳丘を確認した6基の古墳は、15m内外の規模をもつものである。本地区は盆地を望む丘陵突端部にやゝ古墳がまとまって分布するが、その内部構造の知られるものは、5号墳のみで、南に羨道をもつ横穴式石室と推定され、一枚の棚をもつ可能性がある。なお墳丘は認められないが、箱式石棺の板材と思われるものが、2カ所見出され、そのうち3号墳は、須恵器埴輪の完形品を採集した。それによると明らかに畿内須恵器編年の第1型式後半の特徴をもつものであることが知られる。

東山東地区は1基の古墳を見出したが、『はにわ』によると、大河内小桜に桜山古墳群として5基以上の古墳があったことが述べられているが、我々の踏査の際には確認できなかったが、これを加えると6基以上の古墳があったことが知られる。いま確認された1号墳(高岡古墳)は、伊太祈曾盆地の南を劃する丘陵突端部付近にあり、羨道をもち、緑色片岩の板石を小口積にして構築された横穴式石室で、一枚の棚をもっている可能性がある。

以上、三地区の概要を記した。本調査の目的の一つに岩橋千塚の範囲を確認することが含まれていたが、山東地区、木枕地区の古墳は岩橋山塊南斜面にあり、岩橋千塚古墳群と同一丘陵に分布するが、生活環境はやゝ相違が認められる。岩橋千塚古墳群の大部分のものが、紀の川とそれによって形成された沖積平野を生活の基盤とするに対して、和歌山東部地区（山東、東山東、西山東、木枕地区）は和田川と和田盆地、伊太祈曾盆地在生活の舞台と思われる。特に今次調査の三地区は伊太祈曾盆地在生活の場と考えられる。この狭少な伊太祈曾盆地を基盤とする生産力は和歌山平野のそれとは較べものにならないと思われる。このように生活環境の相違があるにもかかわらず、我々が対象とする古墳そのものについては、岩橋千塚古墳群の特徴と考えられる、墳丘築造のいわゆる馬蹄形あるいはコの字状の周濠状の施設、内部構造は結晶片岩による細石の小口積による石室、石棚、石梁、前道の存在などについて考えれば、それぞれわずかに知りえた、西山東8号墳、木枕5号墳、東山東1号墳などの内部構造にも見出されるところであり、現在の段階では岩橋千塚古墳群と区別すべき特徴は見出されない。しかしながら、窯業生産遺跡について目を向けるとき、この地が6世紀から新しい生産手段を獲得したことを知ることができる。吉礼沙羅谷窯址は寺内59号墳、60号墳発掘中に地形測量を行なった際に2基の窯を確認し、さらに敷基の窯の存在が考えられる。採集された土器は、森浩一氏編年の第Ⅲ、Ⅳ型式のものである。さらに4カ所の窯址が知られているが、なかでも南畑の窯址は、その灰原の範囲の広いことと、その量の多いことなどから、生産規模の大きかったことを知るのである。沙羅谷窯址以外はほぼ奈良時代から平安時代の土器を見出すが、時期的な点については不明な点が多く、その生産の推移をたどることは難しい。今後その実態を究明することによって、その生産集団の帰属の問題も明らかにされるであろうが、古墳の示す様相からみて、岩橋千塚古墳集団の中に包括されると考えられるが、位置づけや体制については今後の検討をまちたい。

以下分布調査の見通しについて若干述べてまとめとしたい。昭和37年より本研究室によって実施された岩橋千塚の総合調査はその主要な地区についての調査を終了し、昭和41年度より東部地区の踏査が行なわれたが、さらに岩橋山塊の東への延長である、小倉、船戸、にもそれぞれ20基程度の古墳が見られるのであり、その内容は岩橋千塚古墳群とは相違する点がみられ、また那賀郡、貴志川流域に見られる古墳については、さらにその感を深くするのである。いまひとつは紀ノ川北岸に見られる古墳で、わずかに知られた2,3の古墳からみて、岩橋千塚とは異なった様相を持つ点が見られる。しかしこれらの地区はその実態は不明な点が多いのであり、将来の調査が期待されるのである。

（文責 檀本誠一）

調査団の組織および参加者名簿

調査団長

末永雅雄

副団長

蘭田香融

参与

網干善教

森浩一

調査団事務局

稲垣優

塩路保雄

平原陸奥

竹光健次

調査協力者

池端義員

植田法彦

大谷力造

大野嶺夫

奥一作

堀磨正信

吉備慶舟

小賀直樹

小林国太郎

武部吉宏

巽三郎

田中敬忠

中尾憲市

中村正寿

秦昭長

林文雄

松田茂樹

三尾功

宮田啓二

(五十音順)

調査参加者

藤井祐介

菅谷文則

櫃本誠一

福島隆昭

奥田豊

河上邦彦

笠井保夫

水口昌也

田中達夫

中井一夫

峯正明

久見由利子

岡田博

小川良太

村越直嗣

吉岡哲

山本三郎

佐々木和子

松岡幸子

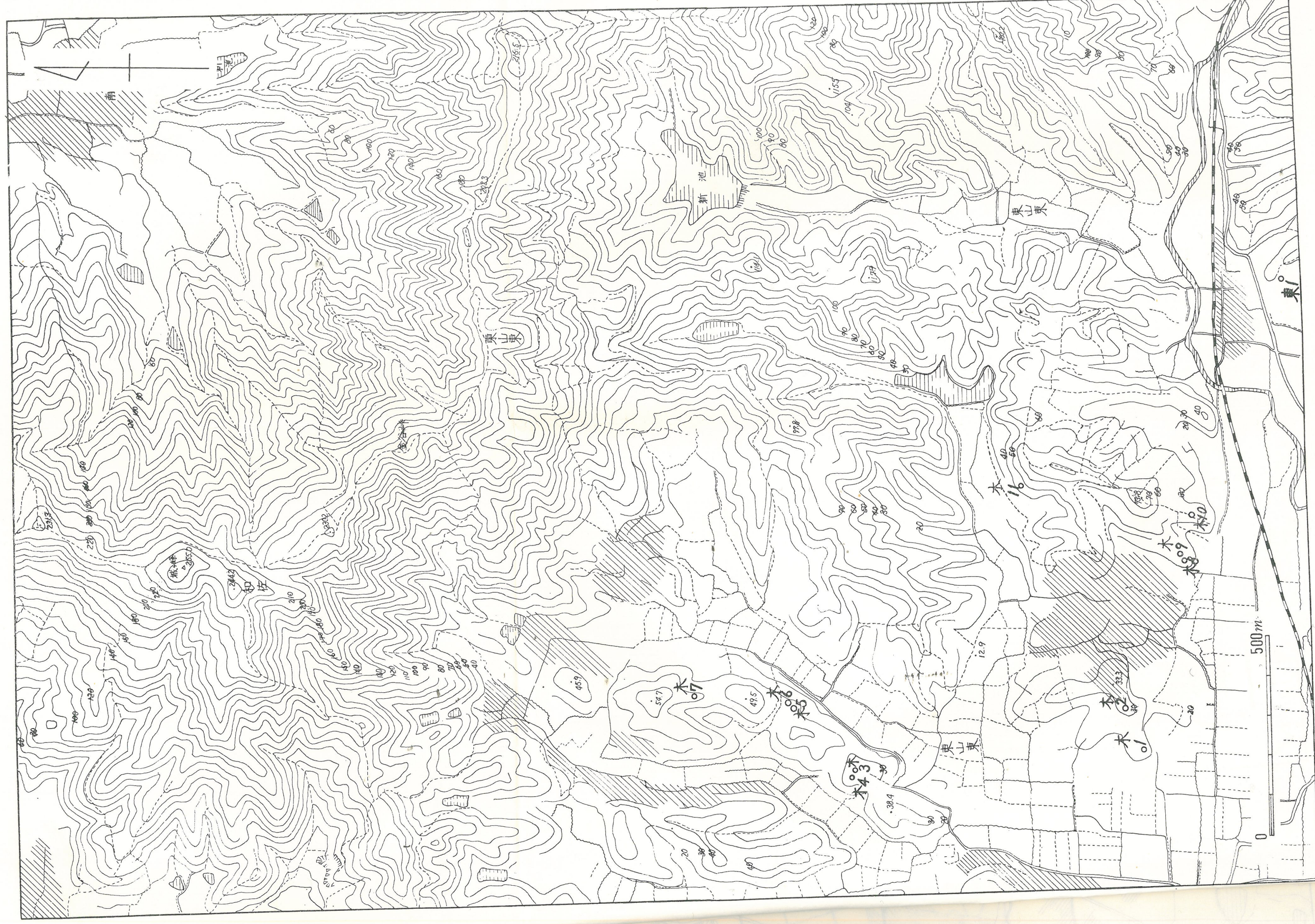


第 1 図 和歌山市東部地区の地区区分と分布図の分割図

1	『岩橋千塚』	78頁	分布図 (一)
2	同 上	77頁	同 上 (二)
3	同 上	79頁	同 上 (三)
4	同 上	80頁	同 上 (四)
5	同 上	83頁	同 上 (五)
6	同 上	84頁	同 上 (六)
7	同 上	81頁	同 上 (七)
8	『第一次分布調査概報』	付 録	第 2 図
9	同 上	〃	第 3 図
10	同 上	〃	第 4 図
11	同 書	〃	第 2 図
12	同 上	〃	第 3 図
13	同 上	〃	第 4 図

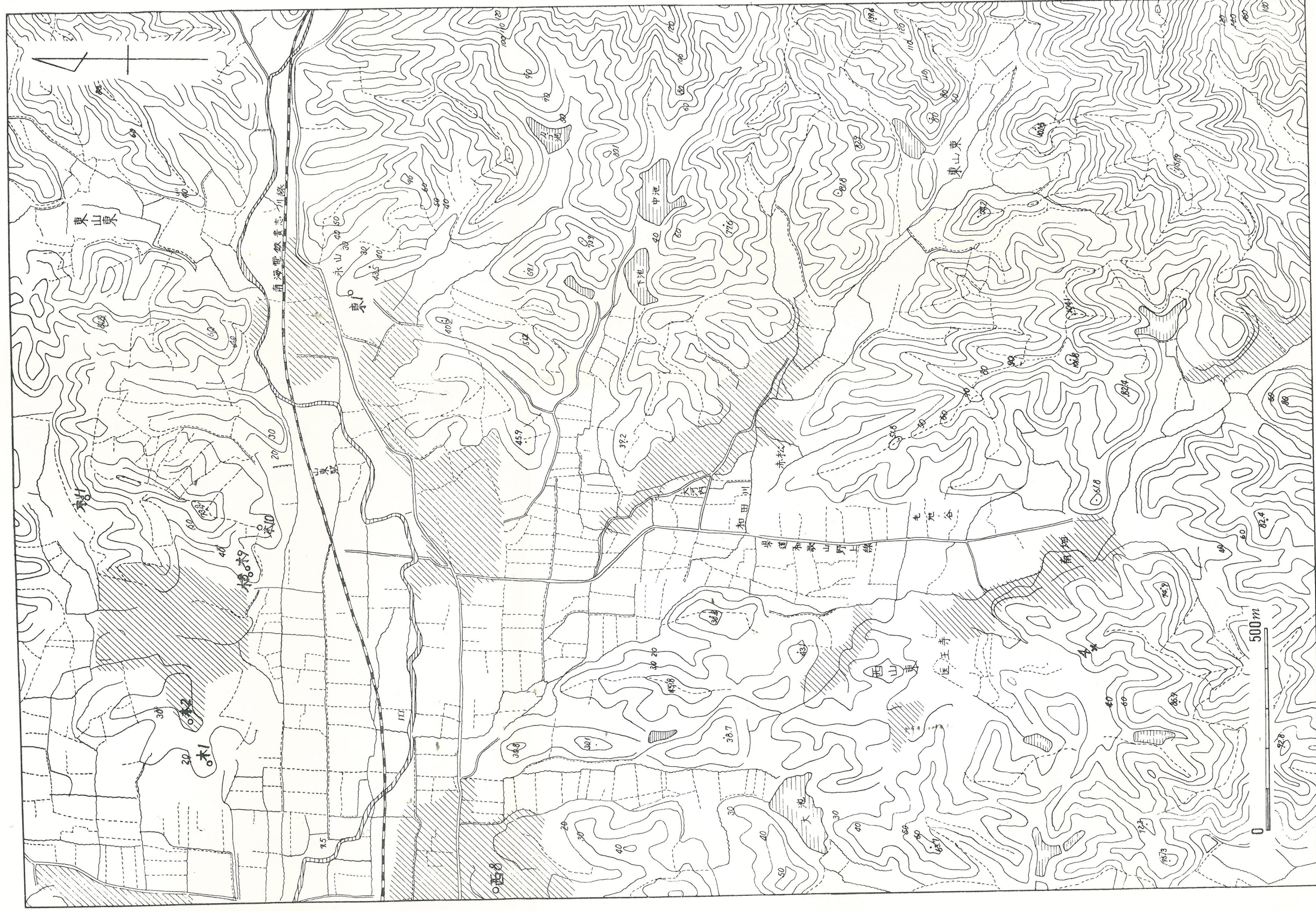


第2図 西山東地区（含寺内地区の一部）の遺跡分布図（分割地図11）
○印古墳 ×印築址



第3図 木枕地区の遺跡分布図 (分割地図12)

○印古墳 ×印築址



第4図 東山東地区の遺跡分布図 (分割地図13)

○印古墳 ×印築址

昭和43年3月30日印刷・発行

大阪府吹田市千里山

編著者 関西大学文学部考古学研究室

代表 末永雅雄

和歌山市西汀町1番地

発行者 和歌山市教育委員会

滋賀県大津市松本一丁目8-17

印刷所 堤印刷所

